

## 住みださし 思うたまの 村よれせ 匠者の わらぬは 夢のみにあく

歌集  
 味曾汁の香



昨年未頃、治紗祖谷村の村民の伊達泰介さんより、氏の歌集「味曾汁の香」が届きました。氏にとっては第三集目（三六）首が選びぬかれて編集されました。上の歌もその一首ですが、その地にも「ふるさとにバス近きぬ吹く風も山も小川もひびくべとなつかし」など山奥の歌をほめて四季・民族、そして最愛の七妻によせる「歌が

多く、そのエネルギーが伝わりてきました。「思い出は今我が胸にあふれきて生家すら無きふるさとの村」からは、二〇〇六年治紗祖谷村が独立宣言し活動しはじけると、すぐに村民に登録されたのが、なる程ひめと伝わり熱くなりました。八二才になるそうですが、お元気な米

手をお迎えし、ぜひ白寿に第四集「手に出来ればとおもいますので、私も日々努力し、村の活動をしたいと思っています。所で、住みださし」の歌を読んだ時「夢みくばどこに住んども同じ」と匠者の「あまみくし」がうかびました。

この絵の様は山奥に住んでると「不便は、当然のことなのだ……悪くかうお。ただ、〇〇がはい、〇×がないなど田舎を否定的にとらえる人がひんと多いことかその上、出る杭を打つばかりでなく、足を引くことも少なくない。

補助金頼みのイベント、イベント疲れの職員、どこ民間の会社やら、とつくに破産して、るごうつ。情報が多すぎると、何が必要なのかが見えづらいのか、親光やエゴサ景観という言葉やまげに踊らされ、踊り本来の楽をみえ、面白さを感ぜられず、疲れだけが残りましまつ。もう、そろそろ、何んとかしなげれば、大きな建物や慶屋とまてて点在しかねない、即ち、大きき跳べまて、とつかり大地に足をつけ、はねてみまてはどうかしようか、